

塩胡椒・purely 熊本地震復旧工事報告

合同会社 風土デザイン建築事務所
坂井信彦

2020.3.21

本日のお題

I .塩胡椒・purely 被災状況の比較

II .被災状況の違いについての考察

III .復旧工事の方針

IV .purely復旧工事の状況

V .棧付きパネル式板倉構法による古民家復旧工事

I .塩胡椒・purely 被災状況の比較

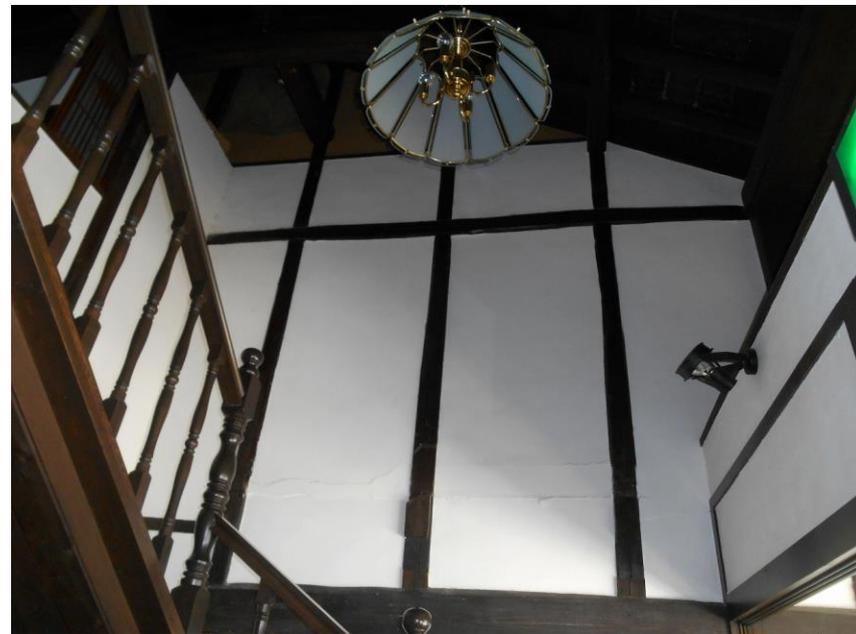
塩胡椒

外観の印象⇒損傷は大



外観上の印象は瓦のズレによるところが大きい

内観の印象⇒損傷は小

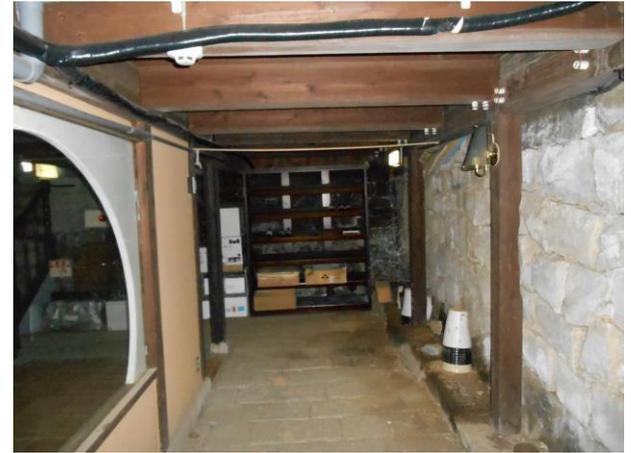


内部の壁の割れ浮きはあるが軽度の印象

塩胡椒



瓦のズレによる漏水



上階土壁の剥落



柱・梁の仕口、鴨居のゆるみ

purely

外観の印象⇒損傷は小



防災瓦に葺き替えていたので正面の屋根被害はなし

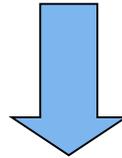
:内観の印象⇒損傷は大(半壊)



内部の土壁はかなり浮き・剥落がみられる

Ⅱ.被災状況の違いについての考察

・2軒とも古民家を活用した店舗だが、2階積載荷重の違いが被災度に影響



飲食店である塩胡椒の2階には椅子・テーブル以外、目立った重量物はなかった

purelyには物販機能があり、1階をなるべく販売スペースにあてるため商品倉庫や事務所が2階だった(重量物)

※復旧工事においては建物の使用形態(業種)によって手法を検討すべき

Ⅲ.復旧工事の方針

塩胡椒

- ・屋根の瓦工事(当方担当外)を除けば被災ダメージは小

- 1.柱・梁の仕口の緩みは金物補強
- 2.土壁部分の漆喰割れ・浮き部分は乾式工法の漆喰塗り
- 3.地下の石垣部分はモルタルにて目地詰め補強

purely

- ・重量物があった2階倉庫・事務室・1階厨房(地階の上)部分の被災ダメージは大

1～3は左記共通

- 4.棧付きパネル式板倉構法で建物の軽量化と耐震性の確保
- 5.面格子板壁により耐震性とデザイン性を確保
- 6.耐震リングにより柱・梁の仕口を保護
- 7.厨房位置の変更と2階積載物の検討

IV .purely復旧工事の状況







V. 棧付きパネル式板倉構法による古民家復旧工事

- 熊本地震の特徴は巨大地震に2回見舞われたこと以外、その後の余震回数の多さがあげられる。古民家の土壁は地震で竹小舞から剥落するが、余震により日々土壁の落下する面が増えていくのを目の当たりにした。

⇒土壁を塗り直す再生工事では、次の地震時にまた同じことが起こってしまう。

- 「棧付きパネル式板倉構法」による復旧工事が最適と判断。剥離した土壁部分を板倉壁とすることで、建物全体の重量を軽減でき耐震力もアップする。そして重要なのは次の地震に対し板倉壁が緩んだとしても、ビスや釘を打ちなおすことで板材パネルは再利用できるという点だ。

⇒被災時に復旧工事資金を軽減できることは、古民家の長期的な保存に必要な条件ではないか？

- ひとつ懸念は、既存の漆喰塗り真壁と板倉壁が混在した内観が違和感なく感じられるかということ。この点については新材を使った新たな工法を採用することから、割り切って板倉壁部分をあえて無塗装とし、新旧材を対比させる構成をとった。

■建物の用途によるが「棧付きパネル式板倉工法」による復旧工事は、古民家再生の一つの有力な手法だと考える。